

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2019.12) 令和元年度:7-8.

白血病患児の母親に対する小児病棟看護師の看護実践～病名告知後の
心理的ケア～

三上 莉都, 山崎 聖耀

白血病患児の母親に対する小児病棟看護師の看護実践 ～病名告知後の心理的ケア～

三上莉都 山崎聖耀
(指導：森浩美)

緒言

小児看護は患児だけでなく、その家族に対する看護介入も重要となる。田邊らは、白血病という病名を告知された両親は、自分の子どもが白血病であるという事実に加え、わが子の死が間近に迫っているという苛酷な現実を認識せざるを得なくなり、今まで経験したことがないほどのショックと絶望を体験している¹⁾と述べている。このことから、白血病患児の家族にとって、病名告知から子どもの疾患を受容するまでの心理的負担が大きいということが分かる。同時に、その心理的負担に対する看護介入が必要となり、小児病棟看護師が担う役割は大きい。

そこで本研究は、小児病棟看護師が行う白血病患児の母親に対する病名告知後の心理的ケアを明らかにすることを目的とした。

方法

研究対象者：小児病棟に勤務し、これまで白血病患児の母親に対する病名告知後の看護を担当したことがある看護師とした。

データ収集方法：倫理審査委員会の承認を得た後、病院の看護管理者に対象となる看護師の選出を依頼し、紹介を得た。そして、面接の日時と場所を決めた。事前に面接の練習を行ったうえで、プライバシーが保たれた個室にて、指導教員の同席のもと学生2名と対象者で半構成的面接を行った。面接は、一人につき30-45分程度とし、研究対象者の同意のもとICレコーダーに録音した。

調査期間：2019年9月

調査内容：対象者の概要として年齢、看護師勤務年数、小児病棟勤務年数は直接、本人に聴いた。面接の質問項目は①病名告知後の小児病棟での母親の反応と心理的負担、②母親に対する看護、③介入後の母親の心理的变化、④母親に対する看護経験から得たことを自由に語ってもらった。

データ分析：面接内容の逐語録を作成し、語られた内容を理解した。次に、対象者が行った白血病患児の母親に対する病名告知後の心理的ケアについてコード化し、コードの相違点、共通点について比較・分類し、サブカテゴリー化した。そして、サブカテゴリーに適切な名前を付けて抽象度を上げ、カテゴリー化した。分析の妥当性を確保するため、研究者で複数回、分析を繰り返した。

倫理的配慮

本学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号：19071)。対象者に対して、文書及び口頭で研究の目的や方法、匿名性の確保などについて十分な説明を行い、同意を文書及び口頭で取得した。また、面接実施時は対象者の体調に配慮し、面接時間を厳守して対象者の仕事や私的時間に支障が生じないように行った。

結果

1. 対象者の概要：20代の男性看護師2名

2. 分析結果：88コード、18サブカテゴリー、7カテゴリーを抽出した(表.1)。以下、カテゴリーを【 】、語りを「 」で示す。カテゴリーは【母親を理解する】【母親の強さを信じる】【父親も含めたチームで母親をサポートする】【母親に安心感を与え、穏やかにいられるようにする】【母親と信頼関係を築く】【母親と協力する】【母親を看護するために自分も成長していく】であった。

【母親を理解する】では、看護師は「突然症状が出て診断されるため、急に重たい疾患であることを告げられるとすごい負担だと思います」と話し、母親のつらさを理解するようにしていた。【母親の強さを信じる】では、看護師は「受け入れ難い事実ですけど、それでもやっぱり本人のためにはやらざるを得ないという決断ができていたと思います」と話し、がん治療を受ける子どもの母親を尊敬し母親の強さを信じて関わっていた。

【父親も含めたチームで母親をサポートする】では、看護師は「お父さんがお母さんと子どもと気持ちのところで離れないように、架け橋的なことをしようと心がけています」と話し、父親も含めたチームで母親をサポートしていた。【母親に安心感を与え、穏やかにいられるようにする】では、看護師は「同室に同じような疾患の人がいて、お母さん同士で話ができるのは、自分だけじゃないっていいか、きっとお母さんの心の支えになっていたと思います」と話し、一人ではないと母親が思えるように関わっていた。

【母親と信頼関係を築く】では、看護師は「お母さんが、再発とかがって聞いたらやっぱりショックだと思うんですけど、それでもお母さんが笑顔でいたのは、慣れた環境で信頼しているスタッフが子どものケアをしていたからだと思います」と話し、母親と信頼関係を築き、支えていた。【母親と協力する】については、看護師は「お母さんの存在は協力者みたいな感じですね」と話し、母親との協力関係を築いていた。

【母親を看護するために自分も成長していく】では、看護師は「看護経験を通してまだまだ自分の能力が不足しているというのと、その中で自分でもまだできることがあるんだと思いました」と話し、自分の看護経験を振り返っていた。

考察

看護師は病名告知後の母親に対する心理的ケアとして、まずは【母親を理解する】ことを挙げていた。看護を行う上で対象者を理解することは必要不可欠である。現在、白血病は長期生存が可能な疾患となっている。しかし、療養生活は長期に渡り、「がん」という言葉のイメージもあり、病名告知を受けた母親の心理的負担は大きい。その状況では子どもにも良い影響は及ばない。看護師は母親のつらさや不安、病気の理解や性格など、【母親を理解する】ことから始め、母親にあった

看護により心理的負担を軽減していたと推察する。そして、母親と話すタイミングや場所を考慮し、配慮ある情報収集を心がけていた。

また、心理的負担が大きくても子どもの病気を受け入れ、つらい体験をしている子どもを支えようとする母親を看護師は尊敬していた。そして、【母親の強さを信じる】ことを心理的ケアとして実践していた。看護師は母親が病名告知を受けて落ち込んだり、悲しんだりしても、母親として子どもを守り、乗り越えられると信じ、待つ姿勢でいることは重要である。そして、母親も自分を信じ、見守る看護師の存在が支えになると考える。

看護は看護師同士や多職種が連携・協働し、それぞれの専門性を発揮することによって質は高められる。看護師は母親に対する心理的ケアとして、【父親も含めたチームで母親をサポートする】ことを挙げていた。父親は母親をよく知り、母親にとってのキーパーソンである。その父親がチームに加わることにより、母親へのケアは充実する。また、看護師が病棟での母親の様子を父親に伝えたり、家での母親の様子を父親から聞いたりすることにより、父親と母親の橋渡しになり、絆は強まると考える。子どもが白血病となると家族は危機に直面する。そのときに、母親が父親の助けを得て子どもの付き添い生活に集中でき、家族が丸となって母親を支えられるように父親に介入していくことは母親へのケアとして大切であり、看護師に課せられた重要な役割であると考えられる。

看護師は母親と関わっていく中で【母親と信頼関係を築く】ことを心理的ケアの次の段階として挙げていた。また、看護師は母親と信頼関係が築けているかどうかは、母親の表情や話し方をみて判断していた。看護師が母親の心の支えとなるためには、母親と看護師がお互いに信頼し合うことが重要となる。そのため、看護師は様々なケアを通して母親と良い関係を築いていくことを心理的ケアとしていたと考える。そして、母親との信頼関係が基盤となり、【母親と協力する】ことも母親に対する心理的ケアとなっていたと推察する。小泉は、ターミナル期にある重症心身障害児の看護師の役割として、最期まで家族の主体性を支え、子どものケアパートナーとして家族に寄り添うことが重要である²⁾と指摘している。本研究においても看護師は子どものケアパートナーとして母親を捉えていた。子どもがどんな病状であっても、看護師が子どもを看護する仲間として母親を位置づけ、同じ目標に向かって協力することの重要性が明らかとなった。

次に、看護師は【母親に安心感を与え、穏やか

にいられるようにする】ことを心理的ケアに挙げていた。病名告知後の母親は、付き添い生活の中でストレスを溜め、自分の気持ちを我慢して一人で抱え込んでしまうこともある。四方らは、療養中の子どもをもつ母親は孤独感が生じやすいため、看護師の情緒的なサポートによって精神の安定を保つことができる³⁾と述べている。今回、看護師は看護師だけではなく、同室患者の母親との関係性も重要視していた。病名告知後には、母親の心の緊張をほぐし一人ではないと母親が思えるように声をかけ、同室患者の母親との関係作りなども支援しながら母親の気持ちに寄り添うことも大切であることが明らかとなった。

ケアとは本来、患者を援助し、働きかけることである。しかし、本研究の看護師は【母親を看護するために自分も成長していく】ことを母親に対する心理的ケアとしていた。看護師が母親への看護を実践したり、研修を受けたりする中で、自分の未熟さに気づく日々が影響していた。これは、未熟な自分では母親に十分なケアを提供することはできず、成長することによって心理的ケアができるようになるという間接的な繋がりではないかと推察する。加えて、看護師は病名告知後の母親を看護する経験は、自分自身の成長の機会でもあると捉えていた。これまでの自分の看護を振り返り、看護師自身の知識と技術、経験と可能性を最大限に発揮し、成長していくことが母親のよりよい心理的ケアにつながっていくと考える。

結論

1. 看護師の母親に対する心理的ケアとして、母親の強さを信じ、協力することが挙げられた。
2. 看護師は同じ目標に向かってケアを行う仲間として母親を捉えていたことが明らかとなった。
3. 母親と共に子どもを看護するためには、看護師自身の成長が鍵になることが示唆された。

謝辞

本研究にご協力頂いた対象者の皆様、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 田邊美佐子, 瀬山留加, 神田清子(2008):小児がん経験者の子どもを持つ父親と母親の語りからみる療養生活構築のプロセス, The Kitakanto Medical Journal, 58(1), 38.
- 2) 小泉麗(2018):ターミナル期にある重症心身障害児の家族への看護師のかかわり, 日本小児看護学会誌, 27, 128.
- 3) 四方麻祐子, 大橋純子(2019):医療的ケア児の母親が病棟から自宅で医療的ケアを習得, 実践, 習熟するプロセス—周囲のサポートと医療的ケア行動の原動力に着目して—, ヒューマンケア研究学会誌, 10(1), 28.

カテゴリー	サブカテゴリー	
母親を理解する	病名告知を受けた母親を理解するために情報を集める	告知を受け病気に良いイメージを持たない母親を理解する
母親の強さを信じる	病名告知後の話を聞ける状況を整えてから母親に話を聞く	病名を告知された母親の辛さを理解する
父親も含めたチームで母親をサポートする	がん治療を受ける子どもの母親を尊敬する	子どもと母親が治療や環境に適応していくのを見守る
	母親の乗り越える作業のために病名告知は早いほうがよいと考える	
母親と信頼関係を築く	医療チームで病名告知後の母親をサポートする	父親の助けを得て子どもの付き添い生活に集中してもらう
	父親に介入することで家族がチームの一員となり母親をサポートする	
母親と協力する	母親と信頼関係を築き、支える	
母親に安心感を与え、穏やかにいられるようにする	母親との協力関係を築く	
母親を看護するために自分も成長していく	母親の心の緊張をほぐす	一人ではないと母親が思えるようにする
	自分の看護経験を振り返る	悲しいという感情を大事にする
	未熟な自分を受け止める	病名告知後の母親を支援するためにコミュニケーション力を備える